

社会調査における 制御可能性と不可能性

今井 信雄*

■要 旨

社会調査における調査の場は制御可能と考えられてきた。たとえば、ラポール構築がめざされるのは被調査者の「本音」に到達するためである。そしてそのような調査観のもとで、調査者—被調査者は固定的な役割を想定され、その役割にあうように調査の場が制御される。そこでの調査者—被調査者は「持続的自己」とも言える存在であった。そのうえで、本稿では次の3つを指摘する。(1) 調査する場の制御は、その調査が真偽判断のレベル（本当か嘘か）に位置づけられたとき、はじめて成立する。(2) 真偽性のレベルは、調査者や被調査者が持続的自己として位置づけられたときに成立する。(3) 持続的自己は合理的理解を想定し、追体験的理解を想定しない事で成り立つ自己像である。しかし、被調査者という他者を理解するため、合理的理解と追体験的理解とを設定したときに、このような「持続的自己」や制御される調査の場の根拠はゆらいでくる。なぜなら、調査者としての自己は「場」に括られているからである。そして社会調査を「事実」「意見」「感覚」という3つのレベルの応答と捉えた場合、この3つのレベルは制御可能な調査のレベルから制御できない調査のレベルまでを示していると言える。

キーワード：制御される調査、自己、追体験、場所と場

1 ラポール——本音を話してもらうための技法

まず、こんにち多くの「社会調査」で用いられている「ラポール」という語から、いくつかの論点を導き出そうと思う。ラポールの定義を紹介すれ

*関西学院大学

ば、次のようになる。

社会調査にあたって、調査を実施する調査担当者と調査の対象となる被調査者との間に成立する友好的関係。この友好的関係が確立されることによって、調査の実施そのものが促進されるばかりではなく、収集される資料は、より迫真的な意味を持つ。

[濱嶋・竹内・石川編, 1997: 614]

ここでは、ラポールは調査者と被調査者との「友好的関係」である。そして、この友好的関係は調査の実施を促進させ、さらに、収集される資料に迫真的な意味を与える。すると、この定義で示される「調査の実施そのものが促進」することや「迫真的な意味」とは、どのようなことか。

塩原勉らによる『社会学の基礎知識』[塩原・松原・大橋編, 1969]には調査のプロセスとラポールの関係について記述されている¹⁾。それは「面接調査のセッティングとしては、どのような状況が望ましいか」[塩原・松原・大橋, 1969: 469] (傍点引用者) という問いかけに対する説明として記されている。

第1に、調査員と被調査者との間に、ラポール (= 親密な人間関係) を生み出すこと。面接調査は、1対1の人間関係の中で営まれるのであるから、人間的信頼を受ける調査員でなければ、妥当な回答を引き出すことはできない。

[塩原・松原・大橋編, 1969: 469]

ここでのラポールは「親密な人間関係」とされており、前述の「友好的関係」と近い意味が与えられている。この場合、友好的な人間関係は「妥当な回答を引き出す」ために必要なのだが、妥当な回答とは被調査者の「本音」を導き出すということだと考えられる。これは、ラポールの機能として前述した、調査の実施が促進されたり、資料が迫真的な意味を持ったりすることと、対応関係にあると考えられるだろう。その意味で、ラポールが調査技法

としてめざされる場合、被調査者の回答（語り）は「本音」や「タテマエ」といった真偽性によって判断される位置にある。

この『社会学の基礎知識』からは、「第1」のラポールに関する記述の後、次のような解説が続いている。

第2に調査員と被調査者が、1対1で面接を行うのが望ましい。他者の存在が、被調査者の回答に影響を及ぼすことが多いからである。

[塩原・松原・大橋編, 1969: 469]

回答に影響を及ぼすことで懸念されるのは、被調査者が本当のこと（本音）を言わないのではないかという懸念からである。ここでもまた、回答の「真偽性」が問題となっている。

さらに、上述の引用の次に位置する「第3に」ではじまる文章では、調査員や調査主体が権力体系内にいる（たとえば、調査内容が職場で上司に報告されるのではないかなど）と思われなことが「望ましい」とされている。いずれも、ここでの「調査」はこの点からも「真偽性」のレベルが問題とされていることが前提となっている。そして、調査の場は、「本音」を引き出すために限りなく制御されるべきものと位置づけられる²⁾。本稿では、このような調査観を「真偽判断を前提とする調査」と呼ぶことにしよう。

ここで引用した第2の点には、続けて「スタウファーの復員軍人の調査では妻が同席のとき軍隊生活は辛かったと不平を訴えがちであり、戦友などが同席のときには逆に不平が少ないと報告されている。家族や隣人をなるべく遠ざけるべきである」[塩原・松原・大橋編, 1969: 469]と記されている。このスタウファーの「質問紙法」研究は、科学的に社会的「態度」を明らかにするというシカゴ学派の新たな調査方法であり、ロックフェラー財団によってサポートされた「大規模で統計的な手法を駆使して行われた」ものだという[鈴木, 2003: 50-51]。そのことを踏まえれば、「第1に」として述べられているものも、「ひとりないしは複数の調査員が質問票を持って被調査者の回答を得る」タイプの調査（いわゆる「量的」であれ「質的」であ

れ)を念頭に置くことができる。このような調査が、「真偽判断を前提とする調査」ということになる。

しかし、もう少し考えてみたいのは、「戦友」や「妻」が同席することで意見が変わった(ようにみえた)のなら、それはそれでひとつの「現実」を映し出しているのではないか、ということである。もっと言えば、同席者が存在するという場所によって、被調査者のある現実が語られたと捉えることも可能なのである。そのように考えれば、調査のために「セッティングされた場所」以外に起きている出来事(=制御されない出来事)もまた、被調査者の何らかの現実をあらわしている(社会調査の場が存在する)と言えるのではないだろうか。

2 社会調査と持続的な自己像

たとえば、桜井らの屠場における調査[桜井・岸編, 2001]では長期間、何度も屠場を訪れた結果、「私たちはこの屠場が始まって以来はじめて、写真を撮ることを許された」ような関係をつくりあげたという。まさにラポールの構築である。しかし、本の出版に際しイラストを描いてもらうことになった美術学校の女子学生が屠場にやってきたときに、次のような場面にでくわし、驚く。「私たちは五年も前からこの屠場を訪れているのに、屠夫たちは私がはじめて聞くようなことを彼女に話している。これはいったいどういうことなのだろう」[桜井・岸編, 2001: 252-253]。

われわれは次のような日常を実感している。相手が変われば違った話をすることはよくある。相手の性差や年齢、肩書きや、顔つき、体格、身なりなどによって、態度が変わるとい場合はいろいろなところで起きている。また、家族や友人、恋人や職場の同僚などの関係であれば相手の期待に応えようと話し方やその内容は意図せずとも変わってしまうこともよくある。

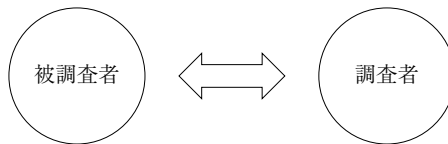
ここで述べたいのは、それら人間関係の中でその人が変容していくことを不問に付したうえで、同じ持続的な個人として存在しているはずだという前提が、「ラポールの構築」から「本音」へ、という調査技法の背後に存在し

ているのではないか、ということだ³⁾。そして「望ましい面接調査のセッティング」という言葉が意味するように、「調査」はセッティングされる（＝調査者によって制御される）位置にある。「真偽判断」が問題とされるとき、たとえば戦友や妻の存在は、調査の場から外側におかれるのである。そこで、本稿では次のことを指摘しよう。

- (1) 調査する場の制御は、その調査が真偽判断のレベル（本当か嘘か）に位置づけられたとき、はじめて成立する。

いつなんどきでもひとつの「本音」を持っている自己、制御によってその「本音」に到達されることが可能と捉えられる自己、調査者の存在が被調査者に影響を与えない自己。他の要因によって「本音」が影響を受けてはならないとされる自己を「持続的自己像」と呼ぼう。

以上のように考えてみれば、持続的な自己は、調査の場のなかでの「ラポールから本音へ」という方向性を保証する前提となっている。「意見」や「本音」は個人のなかにあるのだから、同席者の存在によってその「意見」が曲げられてはいけなとする調査観である。このような調査観では、一般的に社会調査は調査者と被調査者によって行われることになり、それは図示すれば次のようになるだろう。



調査者と被調査者はお互いに向き合い、それぞれが1対1で問いかけと応答を繰り返す。被調査者は自分を変容させるさまざまな社会関係から解放されることが望ましく、個人に影響を与える場は極力避け、そして、調査者も被調査者に影響を与えない、ひるがえって被調査者も調査者から影響を与られない、そういう状況である。ここから次のことを指摘しておこう。

- (2) 真偽性のレベルは、調査者や被調査者が持続的自己として位置づけられたときに成立する。

しかし、このような調査観に問題提起を行ったのが、1970年代のいわゆる「似田貝—中野」論争であった。似田貝は調査する者とされる者との間を「共同行為」として捉え、中野は両者を「異質な者」として捉える、その両者の調査観の違いにもとづく論争であった。

近年、この論争に対しいくつかの評価がなされてきているが、ここでは両者の共通点に着目したふたつの見解を紹介しておく。

まず、桜井厚は両者の主張について次のように言う。「調査者—被調査者と情報の質という点では、従来のラポール論とも共通しているのである。〈共同行為〉が『〈確実な〉知識の積みかさね』になるにせよ、『みせかけ』ではない『人間同士のつきあい』が〈本音〉や〈信頼できる情報〉を得ることになるにせよ、いずれも調査者—被調査者関係のあり方が情報の質を決定するという点では同じ認識を表明している」[桜井, 2002: 67]。そして言うまでもなく、「情報の質」とは真偽判断に基づくレベルを指している⁴⁾。

また、井腰圭介はいくつかの点で深い亀裂が見られるにもかかわらず両者の調査観はともに「社会調査を、調査者が属する研究の世界と被調査者が属する生活の世界とを関係づける行為とする認識前提の共有によって初めて成立」と捉えている、と指摘する。その点で調査を「調査者が属する研究の世界と被調査者が属する生活の成果とを関連づける行為」[井腰, 2003: 39]であるとする視点が存在するという。

この両者の見解をふまえれば、「似田貝—中野」論争における両者の共通点は次のように敷衍できるだろう。つまり、調査の場は、調査者と被調査者の交錯することにより、一方で、研究の世界と生活の世界とが関わり合い、他方で、情報の質をさらに高めていく事につながる、という認識である。

情報の質を高める、つまり真偽判断のレベルで調査の場を捉えることは、持続的な自己像を背景に持っていることをすでに指摘した。その捉え方に立てば、調査者は「研究の世界」を代表する持続的な自己であり、被調査者は

「生活の世界」を代表する持続的な自己である。井越の指摘も桜井の指摘も、この論争の背後に存在する「持続的な自己」像を示唆することとなった。その点で言えば、調査者ははじめから終わりまで「調査者」であり、被調査者ははじめからおわりまで「被調査者」である。調査者が被調査者となり、被調査者が調査者となるような、反転する自己像はここで想定されえない。

前述の「似田貝—中野」論争に関して異なった捉え方をするのが松田素二である。松田は「異質性をそのままにして両者は交通できる」とするのが中野の核心であると述べつつ [松田, 2003: 505]、「分析的理性が王座の位置をしめ、それだけで対象化できないものを感覚、実感と呼んで周縁化(劣等視)」するのではなく「違いをそのままにして他者と共感したり、理解を実感したりすること」を重要だと考える [松田, 2003: 511]。このような調査における自己像とは持続的な自己ではなく、揺れ動く自己である。それは「違いをそのまま」にする自己と「共感する」自己とが同時に存在し、あるいは「理解」する自己と「実感」する自己とが、同時に存在するような、そのような自己像である⁵⁾。

しかし、翻ってみれば「共感」や「実感」をテーマにした研究蓄積は、社会学という学問領域のなかで多くなされてきた。同じ学問領域のなかで、一方で共感や実感の不在が語られ、他方で共感や実感の研究蓄積が積み上げられているということは、考えてみれば不思議なことではある⁶⁾。

たとえばマックス・ヴェーバーの有名な『社会学の根本概念』には、他者理解について次のような言明がある。

すべての理解は、「明確性」を求める。理解における明確性は、二つの種類があって、合理的なもの（これも、論理的か数学的かに分かれる）か、それとも、感情移入による追体験的なもの、すなわち、エモーショナルな、芸術鑑賞的なものかである。 [Weber, 1922=1972: 10]

この社会学の古典に立ち返り、調査の中で被調査者と対峙することを、そ

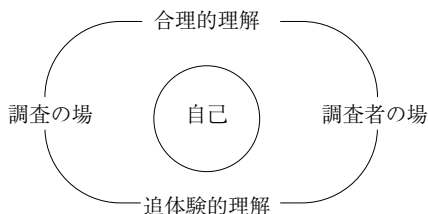
のまま他者を理解することとして捉え直してみよう。すると、調査という場においても、自己（＝調査者）は合理的な理解と追体験的な理解という、ふたつの極を揺れ動きながら他者（＝被調査者）を理解するものだと言える。ここでは、そのふたつの理解のうちどちらかを起点とするような理解のあり方を念頭に置くことにしよう。

そこで、考えておかなければならないのは、調査の場の後景に存在する真偽性判断の場である。そもそも真偽の判断はどのような場で保証されるのであろうか。もちろん調査の場の内側に真偽判断の場は存在せず、調査の場と切り離された調査者の属する調査者の場（＝研究の世界）がその判断の根拠となる。そして、そのとき調査者は調査者や調査の場に影響を与えない（真偽性に影響を及ぼさない）位置取りを与えられる。

しかし、「調査者・研究者」というあり方もまた客観的・中立的・絶対的立場というものではなく、自己のあらわれ方のひとつの形態と想定してみよう。すると、自己は調査者としてのみ存在するのではなく、ふたつの場所のあいだに自己は存在し、そのふたつの場所を往復しながら試行錯誤を繰り返す、という図式ができあがる。



そして、ふたつの理解を社会調査における「調査者－被調査者」の関係に照らし合わせてみれば、自己は追体験的理解と合理的理解とのあいだを行き来することになる。



すると、持続的な自己は合理的理解によって構成される自己と言えるだろう。それに対し、調査する自己とは追体験的理解と合理的理解の間で揺れ動く自己だと言える。

- (3) 持続的の自己は合理的理解を想定し、追体験的理解を想定しない事で成り立つ自己像である。

3 制御される調査の不可能性——被災者・被害者の語りから

これまで本稿では、「調査する場の制御」という点から「真偽判断のレベル」「持続的自己像」「合理的理解」という論点へ展開させてきた。この視点を採用する理由は、調査という営みを「調査する場所／場の制御」という観点から、捉え直すことができるからである。そこで、筆者が行った調査の一部を紹介し調査という営みを再考したい。

阪神・淡路大震災の「語り」

1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災では、数え切れないほどの「調査」が行われてきた。その多くは真偽性のレベルに基礎をおいた調査であったが、大震災という「現実」は、その枠を大きくはみ出すものであった。

たとえば、あの震災はどこで起きたのかという問いを考えてみる。それに対してこのように答えることができる。淡路島を震源とする阪神・淡路間の被災地であると。しかし、次のような場合はどうだろうか。震災に遭ったがすぐに引っ越して被災生活をほとんど経験しなかったひと、震災には遭わなかったがボランティアとして被災地に入ったひと、阪神間には住んでいなかったが身内に被害があったひと…。それぞれ阪神・淡路間に住んでいようと、住んでいまいと、震災と何らかのつながりをもっていることは確かである。しかし、震災という出来事があった空間を縁取る（＝制御する）ことは容易ではない。同じく、誰が被災者か、という問に対する回答もまた困難で

ある⁷⁾。このように、被災地／被災者を真偽判断のレベルで制御できないことは、震災を語るという行為について、持続的な自己を想定することを困難な状況であることを示している。

たとえば、次に紹介する言葉は、震災の傷跡を残すアーケードの下で、そのアーケードが撤去される直前に語られた地元の人の言葉である。「震災アーケードお別れの会」という催しとして、地元の小学校の生徒に向けて語られた⁸⁾。

私はね、ご紹介ありましたように、ここでお漬けもんやさんしました。そいでね、その日のことはものすごくこの場所…、ほんとに忘れることのできない…。今日はほんとには出るのが嫌だったんです。なぜか言いますとね、朝ここで、5時46分にいきなり地震がおこったあと、3階におるのが、しらんまに2階になってねてたんですね。

で、家族ともども逃げたんやけど。両隣、ここだけ。私の家の両隣、死にました。亡くなった。それだけね、ひどい状況だったんです。

その日のことだけ、言いますけど、そういうぐあいにはここが倒れて、外へ出たときに、右のお店の方の人がひとりだけ生き埋めになったんです。そのときはね、声がまだしてたんです。「お父ちゃん、お父ちゃん」て、言うてたんですね。そいでいっしょうけんめいどける…、あの私はパジャマのまま、ベンチとかそんなだけもって、石をね…、なんせあの、木造やなしに鉄筋なんで、石をどけていかなあかんということ。石をいっしょうけんめいどけよったんやけども。どかないんよね。鉄筋で。そういうぐあいにね、いっしょうけんめいみんなで近くの人なんかと、声がしとるから、いっしょうけんめい掘りよったらね、だんだん声がちっちゃくなってきた。そいでね、もうどないすることもできへんところに、近くから火が入ったの。ちょうど一番西っかわの奥の方から、火が入って…消すにもね。そこの前までいったんですよ。火事の火が入ったところまで行ったけど、消すもんがない。がれきの中で、消化器もわからないし、なにもわからない。そいでね、今度は火が入ったから、

すぐ逃げなあかん…。もう、すぐに火がどんどんどん燃えてくるんで、一階に家族つれていったんちょうど外へだして、家族をいったんお友達の家に入れて帰ってきたら、今度はそこらじゅう火事になった。ここも燃えてる…。それからね、こんどはここからね、そういうお店のシャッターがね、全部真っ赤になってね、シャッターがポーンと飛び出すようになってきてね、もう危なくておれない。だからここにバリケードをね、バリケードをして、人がとおらんようにということで、もう一日中そんなことをやってたような状態…。そんでやっとな疲れ果てて、そのまま、その日近くのお友達の家泊めてもらったんです。

次の日、またいろいろやってたけども、行くところにもないから、わたしは明石のほうの親戚の家まで、歩いて、家族を連れて行きました。そっからね、いろいろはじまったんですけども、実際に私はその当日はね、ここで、ほんとに、ほとんど一日おったような記憶がありません。

それと私とこの両隣亡くなりましたけれども、うらで、たまたま私とこ長屋でね、ちょうど家を改装したとこだったんで、うちの家だけが残っちゃってね、両隣は家全部つぶれました。片っぱのほうは針が折れてね、針に刺さって亡くなっちゃった。

だからね、何がどうなるかわからないんやけども、私はもう建物もなくなり、全部なくなったけども、家族はぜんぶ残りました。だからね、いまこうして元気でおります。みなさんもみながんばってこれから、みな、ね、これから、おかあさんやおとうさんみんな家族大事にする。それがねやっば震災のときいちばんだいじな人は、家族とか親戚とかね、そういうのがやはり、みんな仲良しにしとかなね。いざというときにね、「なんやあたいあんなん入れるな」とかね、そういうぐあいなっちゃうおそれがあるから。家族は大事にしてくださいね。以上です。終わります。

筆者は実はこの語りに出会う数週間前にこの語り手に話を聞いている。場

所はビルの一室で、語り手のお仕事の途中で時間を割いていただき、お話を聞かせていただいた。震災のあと、長田南地区の復興をめざして奮闘されたこの方にお会いするのははじめてであったが、こちらのお聞きしたい設問に丁寧にお応えくださった。

しかし、もし、筆者が上述の語りのような内容を期待するとするならば、どのような問いかけになるのだろうか。「被災当日の様子はどのようにでしたか?」と問いかければよいのであろうか。それはラポール形成によって出会えるのだろうか。あるいは、何度も足を運び、この方と非常に親しくなったときに話してもらえる「本音」のようなものであろうか。

そうではなく、この語りは、再開発地区として工事が進むこの地区で、震災の傷跡が残るアーケードの下で、そのアーケードが撤去されるときに、地元の小学生に向けてはなされるという、その場所において語られる震災の「現実」(＝震災の場)である。そのとき語り手は、持続的自己というより揺れ動く自己である。このような語りは真偽性のレベルで判断されることに焦点があるのではなく、この語りを感じることに、つまり追体験的理解の可能性をはらんでいることに重要な意味がある。そのとき、調査者もまた「調査の世界」という輪郭をはみ出し、その「現実」に遭遇する、揺れ動く自己として存在する。

このような語りは、災害のような大きな社会的出来事について語る際にしばしばみられる。このとき「現実」は、真偽性のレベルで捉えられ得ない存在として調査者の前に対峙する。次に他の調査において出会った言葉を紹介する。

アスベスト被害の「語り」

アスベスト被害とは、中皮腫などの原因となるアスベスト(石綿)を吸引することで、作業員やその家族が被害に遭う社会問題である。アスベストは高度経済成長期以降、建材などに大量に使われてきた鉱物であり、今後、中皮腫患者が増大することが懸念されている。そして現在、中皮腫などアスベストの被害によって苦しんでいる人たちや、アスベスト被害遺族の人たちの

ため、一刻も早い救済措置（被害者すべてへの労働災害補償の適用など）が求められている。

筆者は2005年7月、アスベスト被害者Bさんのご家族であるAさんと、同じく被害者Dさんのご家族であるCさんにお話を伺った。

Aさんの夫Bさんは2002年に中皮腫と診断され、闘病生活の末、2004年8月に亡くなった。Aさんの夫は国鉄勤務時代にディーゼル車の整備をしており、その際、中皮腫の原因となるアスベストを吸い込んだとされ、2002年3月に労災認定を受けていた。

筆者はインタビューの中で、Bさんが労災認定を受けるに至った経緯などの話を聞いていた。そしてその後、Bさん自身のお話にさしかかったとき、Aさんは次のように言った。

「私、主人が言うたことほとんど記憶にない。なに言うて聞いたかわからない……。主人が病気になってからずっと、闘病日記つけてますわ。手術してからね。」

そう言って、隣の部屋に行って、その日記を私に見せてくれた。日記はBさんが書かれたもので、私はそれを読ませて頂いた。Aさんが自分の言葉でBさんのことを話すことよりも、Bさん自身が書いた文章を調査者である私にみてほしい、という行為のように思えた。調査者である私は、この日記がAさんにとってはBさんとの絆だということを感じていた。

私はその日記を読み進めていく中で、次のようなことをたずねた。日記に「おばあちゃん」という言葉があったので、それは誰かかと思い「おばあちゃんというのは…」と問いかけたのである。すると、Aさんは「わたしのことなんです」と言った。「孫がいて、おばあちゃんと呼んでるんです。名前前で呼び合ったことないんですよ。（ご主人からの呼び名は）『おかあさん』から『おばあちゃん』になり、わたしは『おじちゃん』から『おとうさん』になり『おじいちゃん』になり…。（『おじちゃん』という呼び名の理由は）結婚した当時、主人の兄弟の子供がいて『おじちゃん』て呼んでたんで、

私も一緒になって『おじちゃん』で呼んで、結婚した当時は…。それから子供ができて『おとうさん』、孫ができて『おじいちゃん』…」といった。

そのあと、Aさんは「けんかしたときだけ呼び捨てで…」と言って少し笑顔を見せた。

お互いをどのように呼ぶかということは、お互いの関係を確認することでもある。そのことを語っているとき、Aさんが微笑んだのは、Bさんとの人生をもう一度感じているのだと私は思った。

また、AさんはBさんが自分の病気を「ガンくん」と呼び、対話をするようになったことや病気の痛みが激しかったことなど、当時の闘病生活についても話してくれた。私はそのような言葉を聞きながら、自宅療養であったBさんの闘病生活を心の中で思い描いた。

このとき、調査者としての筆者がAさんの自宅という「場所」にいることの意味は、どのようなものだろうか。まず、調査者である私をご自宅に伺って、実際にご主人が闘病生活を送っていたお部屋のそばにいるということ、Aさんの大切にしている日記があり、それをすぐに見せていただいたこと、などがある。そして、それぞれが重要な調査者の経験として調査のなかにくみこまれていく。調査者としての筆者はその「場所」にいて、Aさんの語りや表情を感じ取り、Bさんの闘病生活を頭に思い浮かべ、当時のAさんとBさんとを想像する。調査者としての筆者がAさんがBさんと人生を過ごしてきた場所にいる、と感じ取ることができる、ということ。そのような総体として調査の「場所」がある。つまり、調査者である私はこのとき、Aさんの自宅という場所を通じて、調査である場に括られて存在しているのである。

Cさんの夫Dさんも、国鉄職員時代にアスベストを吸い込んだことが原因で中皮腫を煩い、亡くなった。AさんとCさんは知り合いである。Cさんもまた筆者からのインタビューに丁寧に対応してくれたのだが、このインタビューの中でも、筆者は調査という場／場所にかかわる、次のような言葉を聞いた。

「(AさんとCさんが話をしていたときに、) あれだけアスベストアスベスト言われたら、テレビでも言われ、新聞でも言われてね、なんか飽き飽きくるなあ、言うて。なにが私たちが言いたいか、いうたらね、クボタの問題はともかくとして、アスベストもともかくとして、私たちは国鉄なんですよ。国鉄で、労災認定を受けて、会社側を訴えたい、いうのがあるからね。会社側にね、こんだけ中皮腫患者がでてくるんやで、いうことをね、知って欲しいいううんかな。自分たちがこんな危険なものを社員に使わせてたんや、いうことを認識して欲しいんですよ。その認識が全然ないから。自分たちは認定は受けてんけど、クボタのほうが大きくなってしまって、アスベストのことが大きくなってしまって、国鉄のことが消されてしまったなあ。そう言う気があって熱が冷めてきたなあ。また、国鉄で認定受けた人が出たら、火がついて、わたしらもがんばらなあかんあと思うやろけど、いまはそういう状態。」

筆者が話を伺う前月までは、このアスベストに関する問題はあまり知られていなかった。一部、神戸新聞などで取り上げられてはいたが、この問題についてほとんど社会的な広がりを見せてはいなかった。それが、6月の末に大手機械メーカー「クボタ」が従業員の被害を公表し、そのあと他の企業も公表することをきっかけとして、大きな社会問題となっていったのである。Cさんのこの言葉は、自分たちが思っていた気持ちとは違うかたちで拡がっていき、世間の注目を受けることとなったこの問題に対する違和感であった。

調査される問題はそれを覆う大きな「社会」のなかで、位置づけられていく。その位置に置かれることで、「語り」も変化する。言い換えれば、調査という場は「社会」の中に括られている。社会調査という場のなかで調査者(と調査対象者)は「場所」に括られ、「社会」に括られ存在するのである。

4 調査の現実を捉えるために——事実／意見／感覚

このように調査という営みを捉え直すと、調査者と被調査者が同じ「場所」に存在することが、調査のあり方を決定するといえるだろう。いままでの論点をふまえて、「場所」とは人が行為する具体的な空間、「場」とは個人を超えたところで意味づけ輪郭づけられる総体、として定義しておくことができる。言い換えれば、インタビュー自体はどこかの「場所」で行われるが、その「場所」を含んだ総体としての「場」のなかで社会調査が行われる、ということだ。

本稿では調査を「ラポール」によって保証し、制御可能とすることだけを強調する方法論を遡上にのせ、そのあり方を検討してきた。ただ注意しなければならないのは、「制御できる調査」だけを強調する考え方が一面的なように、「制御できない調査」だけを強調する考え方もまた一面的である、ということだ。

たとえば、「真偽性のレベル」に焦点をおく調査は、軽視して良いのだろうか。それは違う。一般的に社会調査は「事実調査」と「意識調査」とに分けて考えられており、もちろん「事実調査」の場合は、真偽性のレベルで判断することが求められている。

それに対し、「意識調査」とカテゴライズされる場合、「どのように思いますか」という問いかけとして調査が成立する。ここで指摘しておきたいことは、「～思いますか」という問いかけには「どのように判断しますか」（意見）と、「どのように感じますか」（感覚）とが混在している、ということである。「意見」と「感覚」を比べた場合、「意見」のほうがより「真偽性」や「持続的自己」に相対的に適合的だと考えて良いかもしれない。もちろん、「意見」もまた時間とともに変化する、ということはある。しかし、「場所」によって「感覚」が変わるというレベルよりも、相対的に持続的だと考えてよいだろう。

重要なのは、質問紙調査であってもフィールドワークであっても、これらの「事実」「意見」「感覚」という3つの異なる次元について調査を行いなが

ら、それを意識的に分けずに調査を行ってきたことである。その意味で、はじめに紹介した調査方法論のテキストにみられるような、ある限定された調査方法における方法論を論じたものが、調査全体のイメージとして一般化されていくときの問題点を指摘してきたのが本稿である。とりわけ、調査対象者の「現実」を明かにしようとする調査について、真偽判断や持続的な自己像のみを前提とする調査方法は、適合的でないことが多いのではないだろうか。本稿で示した論点が、読者に何らかの示唆を与えてくれることを願っている⁹⁾。

注

- 1) なお、当該項目の担当者は倉沢進。
- 2) また、当該項目の第4には「なぜ自分が調査対象になったかを納得してもらふこと」、第5には、被調査者が「調査目的に関して被調査者が一応の理解をもてるよう配慮すべきであること」[塩原・松原・大橋編, 1969: 469] が示されている。

いまでは調査の趣旨を十分に説明することは調査遂行の最上位に位置される調査倫理といってもよく、またそのことがラポール形成に結びつくこととして認知されている。しかし、この本が書かれた1969年時点では、「一応の理解」という言い方で示されるような助言に終わっており、そのことが第1のラポール形成と関連づけられてはいない（じつは第5は第4のポイントと関連づけられている）。さらに上記の引用のあと「調査目的と意義について、一応納得できれば、被調査者の回答の価値を認め、調査に協力することによって、自分も社会に自分の貢献をするのだと感ずることができる。これによって調査の実施もスムーズに運び、妥当性の高い回答を引き出すことができる」と示される[塩原・松原・大橋編, 1969: 469]。妥当性の高い回答を引き出す手段として調査目的の説明が位置づけられている。問題はあくまでも、妥当性が高いか低いか（＝真偽性）、ということである。

- 3) あえて言うべきことでもないが、大学生よりも大学教授の方がはるかに調査を行いやすく、大学生よりフリーターの方がはるかに調査しにくい。むしろ、これまでのラポール概念にはこれら「肩書き」について不問にふす技法であったし、むしろそれは織り込み済み、つまり、いままでのラポール論は大学教員や大学生が調査を行う場合の調査技法としてのみ有効であったかもしれない。
- 4) なお、桜井はこのような情報の質（＝本稿でいう真偽判断）にもとづく調査観に対し、「対話的構築主義アプローチ」を主張している。
- 5) 調査におけるふたつの自己について、たとえば新原道信が次のように述べるよ

うな、調査における自己像と重なっている。

この試み（＝ホホワイト『ストリート・コーナー・ソサイエティ』：引用者）は、対象として設定された他者を分析すると言う試みではなくて、いわば自分の身体の奥に眼があって、その眼から自分を含めた外部を見るという試みである。もちろんこれは比喩（メタファー）であるが、このような視線によるなら、自分を語っているのに他者が語られ、他者を語っているつもりがそこに自分があるという状態、他者と自分との間に相互浸透が起こっている状態をあらわしだすという試みなのである [新原, 2002: 100-101]。

- 6) これは、もともと学際的な指向を内包していた社会学という学問が、専門分化し、連辞符社会学として領域（縄張り）を確定させていく事態とパラレルな出来事であると考えられる。

たとえば、田中滋によれば、社会学的対象の広がりから来る連辞符社会学の多様性は、それゆえの多次的、多種・多様な社会学理論の欧米からの紹介を導き、さらにはそれにともなって「理論・方法論は、具体的な研究対象を分析するための道具としての価値ではなく、即自的な価値をもった存在」となる。その結果、即時的な価値としての理論・方法論の研究と「理論仮説の検証のたんなる道具・下僕にすぎない」社会調査、という状況がこれまでであったと指摘している [田中, 2002: 44]。

- 7) これはメディアで震災を経験した場合にもあてはまる。震災をテレビで見た人、その被災状況を見に行った人、その人たちは震災を経験したのか、しなかったのか。体験したのか、体験しなかったか。筆者はかつてこのような問題を「ポストモダン」的な「記憶」の問題として取り扱った [今井, 2002]。
- 8) 神戸市長田区の西神戸センター街には、震災の傷跡を残すアーケードがあった。地元の人たちは震災の記憶を語り継ぐために、このアーケードの保存活動を行っていたのだが、保存費用などの理由により2003年7月に完全撤去されることとなった。このとき、地元の人たちと子供たちが集まって「震災アーケードお別れの会」が開催されたのである。この会は地元の商店主と、地元のふたつの小学校の生徒たちによって行われた。本稿で紹介したのは、ここで語った地元の人言葉である。
- 9) たとえば、佐藤健二は次のような疑問を投げかける。つまり、統計的研究法や量的分析に比して『事例研究法』『質的分析』はどのような形で技法の言語化や、課題共有の努力や、さらにはデータ共有の試みを行ってきたか。1990年代に入る頃になって語られはじめたフィールドワークの知を含めたとしても、あまりに単発的で散漫なものではなかったか』『質的』の旗をかかげる陣営の努力は、私を含めまったく積極性を欠いていたと判定せざるを得ない [佐藤, 2003 a: 12]。本稿はこのような佐藤の指摘をふまえたうえで、フィールドワークの知を分析的に捉えるきっかけとして構成されたものである。また、佐藤健二は量的

／質的二分法の大文字的対立やデータの1次性／2次性の分割について重要な問題提起を行っている（たとえば佐藤 [2003 a] のほか、佐藤 [2003 b] など）。

なお、質問紙調査における「感覚」という視点は、関西学院大学 COE プログラム「『人類の幸福に資する社会調査』の研究」における「国際比較調査研究会」での荻野昌弘氏のコメントに示唆を受けた。

文献

- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編，1997，『社会学小辞典〈新版〉』東京：有斐閣。
- 井腰圭介，2003，「社会調査に対する戦後日本社会学の認識転換——『似田貝—中野論争』再考」，社会科学基礎論研究会編，『年報社会科学基礎論研究 第2号 社会調査の知識社会学』東京：ハーベスト社。
- 今井信雄，2002，「震災の記憶と被災後——その『永遠』と『うつろいやすさ』について」現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』第12号。
- 松田素二，2002，「個人性の社会理論序説——非西欧的セルフ像をめぐる」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』京都：世界思想社。
- ，2003，「フィールド調査法の窮状を超えて」日本社会学会編『社会学評論』212号。
- 新原道信，2002，「日本社会学者の言説」奥田道大・有里典三編『ホワイト「ストリート・コーナー・ツサイエティ」を読む』東京：ハーベスト社。
- 桜井厚，2002，『インタビューの社会学 ライフヒストリーの聞き方』東京：せりか書房。
- 桜井厚・岸衛編，2002，『屠場文化——語られなかった世界』東京：創土社。
- 佐藤健二，2003 a，「社会調査のイデオロギーとテクノロジー」社会科学基礎論研究会編『年報社会科学基礎論研究 第2号 社会調査の知識社会学』東京：ハーベスト社。
- ，2003 b，「『社会調査ハンドブック』の方法史的解説」日本社会学会編『社会学評論』53巻4号。
- 塩原勉・松原治郎・大橋幸編，1969，『社会学の基礎知識』東京：有斐閣。
- 鈴木健之，2003，「アメリカ社会学における理論と調査」社会科学基礎論研究会編『年報社会科学基礎論研究 第2号 社会調査の知識社会学』東京：ハーベスト社。
- 田中滋，2002，「媒介者たちの社会学はどこへ？——フィールドとしての社会学」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』京都：世界思想社。
- Weber, Max., 1922, *Soziologische Grundbegriffe, Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr. (=1972, 清水幾太郎訳，『社会学の根本概念』東京：岩波書店。)

Controllable Investigation and Uncontrollable Investigation

Nobuo Imai*

■Abstract

The survey place in social research has been thought of as controllable. For example, the purpose of rapport building is to reach the true voice of the respondent. In this perception of surveys, the researcher and respondent are seen as having fixed roles, and the survey place is controlled to suit those roles. In this case, the researcher-respondent can be viewed as a continuous self. Thus, this article makes the following three arguments. (1) Control over the survey place is first established when the survey is positioned (true or false) at an authentic level. (2) The level of authenticity is established when the researcher or respondent is positioned as a continuous self. (3) The continuous self is a self-image that consists of things that assume rational understanding and do not assume vicarious understanding. However, to understand the other, that is, the respondent, when establishing rational understanding and vicarious understanding, the foundations of this kind of continuous self or controlled survey place begin to weaken. This is because the self of the researcher is tied up in the place. When we understand social research and the three levels of responses of fact, opinion, and feeling, we can recognize that these three levels express a controllable investigation level to an uncontrollable investigation level.

Key words : controllable investigation, self, vicarious experience, “place” as a space, “place” as the whole